

日本の名作名文ハイライト

斜陽

太宰治

朗読 森下潤子

出所 声の花束

<http://www.koetaba.net/3book/index.html>

teabreak 編

斜陽 太宰治

●冒頭部分

朝、食堂でスープを一さじ、すっと吸ってお母さまが、

「あ」

と幽かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。

「いいえ」

お母さまは、何事もなかったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スープを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張ではない。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などは、てんでまるで、違っていらっしやる。弟の直治がいつか、お酒を飲みながら、姉の私に向かってこう言った事がある。

「爵位があるから、貴族だというわけにはいかないんだぜ。爵位がなくても、天爵というものを持っている立派な貴族のひともあるし、おれたちのように爵位だけは持っていて、貴族どころか、賤民にち

かいのもいる。岩島なんてのは（と直治の学友の伯爵のお名前を挙げて）あんなのは、まったく、新宿の遊郭の客引き番頭よりも、もつとげびてる感じじゃねえか。こないだも、柳井（と、やはり弟の学友で、子爵の御次男のかたのお名前を挙げて）の兄貴の結婚式に、あんちきしよう、タキシードなんか着て、なんだってまた、タキシードなんかを着て来る必要があるんだ、それはまあいいとして、テーブルスピーチの時に、あの野郎、ゴザイマスルという不可思議な言葉をつかったのには、げっとなった。気取るといふ事は、上品という事と、ぜんぜん無関係なあさましい虚勢だ。高等 御下宿と書いてある看板が本郷あたりによくあったものだけでも、じっさい華族なんてもんの大部分は、高等 御乞食とでもいったようなものなんだ。しんの貴族は、あんな岩島みたいな下手な気取りかたなんか、しやしないよ。おれたちの一族でも、ほんものの貴族は、まあ、ママくらいのものだろう。あれは、ほんものだよ。かなわねえところがある」

スープのいただきかたにしても、私たちなら、お皿の上にすこしうつむき、そうしてスプーンを横に持ってスープを掬い、スプーンを横にしたまま口元に運んでいただくのだけでも、お母さまは左手のお指を軽くテーブルの縁にかけて、上体をかがめる事もなく、お顔をしやんと挙げて、お皿をろくに見もせずスプーンを横にしてさっと掬って、それから、燕のように、とでも形容したいくらいに軽く鮮やかに

スプーンをお口と直角になるように持ち運んで、スプーンの先端から、スープをお唇のあいだに流し込むのである。そうして、無心そうにあちこち傍見などなさりながら、ひらりひらりと、まるで小さな翼のようにスプーンをあつかい、スープを一滴もおこぼしになる事もないし、吸う音もお皿の音も、ちっともお立てにならぬのだ。それはいわゆる正式礼法にかなったいただき方ではないかも知れないけれども、私の目には、とても可愛らしく、それこそほんものみたいに見える。また、事実、お飲物は、口に流し込むようにしていただいたほうが、不思議なくらいにおいしいものだ。けれども、私は直治の言うような高等御乞食なのだから、お母さまのようにあんなに軽く無雑作にスプーンをあやつる事ができず、仕方なく、あきらめて、お皿の上にうつむき、いわゆる正式礼法どおりの陰気ないただき方をしているのである。

スープに限らず、お母さまの食事のいただき方は、すこぶる礼法にはずれている。お肉が出ると、ナイフとフォークで、さっさと全部小さく切りわけてしまって、それからナイフを捨て、フォークを右手に持ちかえ、その一きれ一きれをフォークに刺してゆっくり楽しそうに召し上がっていらっしやる。また、骨つきのチキンなど、私たちがお皿を鳴らさずに骨から肉を切りはなすのに苦心している時、お母さまは、平気でひよいと指先で骨のところをつまんで持ち上げ、お口で骨と肉をはなして澄ましていらっしやる。そんな野蛮な仕草も、お母さまがな

さると、可愛らしいばかりか、へんにエロチックにさえ見えるのだから、さすがにほんものは違ったものである。骨つきのチキンの場合だけでなく、お母さまは、ランチのお菜のハムやソーゼージなども、ひよいと指先でつまんで召し上る事さえ時たまある。

「おむすびが、どうしておいしいのだから、知っていますか。あれはね、人間の指で握りしめて作るからですよ」

とおっしゃった事もある。

本当に、手でたべたら、おいしいだろうな、と私も思う事があるけれど、私のような高等御乞食が、下手に真似してそれをやったら、それこそほんものの乞食の図になってしまいそうな気もするので我慢している。

弟の直治でさへ、ママにはかなわねえ、と言っているが、つくづく私も、お母さまの真似は困難で、絶望みたいなものをさえ感じる事がある。いつか、西片町のおうちの奥庭で、秋のはじめの月のいい夜であったが、私はお母さまと二人でお池の端のあずまやで、お月見をして、狐の嫁入りと鼠の嫁入りとは、お嫁のお支度がどうちがうか、など笑いながら話合っているうちに、お母さまは、つとお立ちになって、あずまやの傍の萩のしげみの奥へおはいりになり、それから、萩の白い花のあいだから、もっとあざやかに白いお顔をお出しになって、少し笑って、

「かず子や、お母さまがいま何をなさっているか、あててごらん」とおっしゃった。

「お花を折っていらっしやる」

と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑いになり、

「おしっこよ」

とおっしゃった。

ちっともしやがんでいらっしやらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られない、しんから可愛らしい感じがあった。